

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：23302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23660105

研究課題名(和文) 母と子の相互行為分析から「育つこと」「育てられること」を捉えなおす

研究課題名(英文) Gain a new perspective of "raising" and "being raised" from a behavioral analysis of mother-child interaction

研究代表者

阿部 智恵子 (Abe, Chieko)

石川県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：80337427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：子育て支援センターにおける母子を取り巻くコミュニケーションの発見が2点あった。子どもの泣き出し状況をめぐる場面では、子の母親が他の母親やスタッフに対し、慎重に高度なコミュニケーションを行っていた。従来、気づかれていなかった当事者の戦略性が発見された。また、子どものジャンプ遊びの場面では、子の「あぶない」という発話を媒介としながら、遊びの場면을母子が協働して作り出していることが発見された。

研究成果の概要(英文)：Two points were identified regarding communication between mother and child at the child care support center. The mother of a child who cried was involved in a high level of deliberate communication with other mothers and staff with respect to situations associated with the crying of children. The strategic characteristics of those involved were newly identified. Further, with respect to situations in which the children jumped and played, it was found that through the medium of the child's uttering "It's dangerous," the mother and the child collaborated in constructing a play environment.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：子育て支援 母子の相互行為分析 ビデオエスノグラフィー コミュニケーション 子育て支援センタ

1. 研究開始当初の背景

「子育て」は、社会の変化とともに変わりつつある。少子化時代である。子育てに「自信が持てない」「子どもとどうかかわったらいいのかわからない」「孤独感を感じる」という母親も増えてきている現状がある。今泉は、母親の育児不安について述べる中で、自分から上手に援助を求めていくことができない母親の存在を指摘している。また、地域子育て支援センターは、母親たちが集い育児を共有できる場として期待されている、としている。(今泉、2001) また、猿人類に見る母子関係について、あかちゃんはお母さんが行動を模倣し返してあげること、さらに模倣が強化され、他者とのコミュニケーションに基盤を培っていくと述べている。母親には「より良く育てなくてはならない」という圧力が高まってきている。結果として「子育て」に疲弊してくる。現在では、子育てを地域ぐるみで支援しようという動きも活発になっている。

子育てに悩む母親の増加に伴い、子育て支援の役割は、今後ますます期待される。子育て支援の充実には、実際現場で、母子やスタッフが何を行っているのか、どんな現象が起こっているのかを知る必要がある。また、普段見過ごされている状況が何であるかを把握することが大切であると思われる。けれども、この新しい課題に対応するための子育て支援に関連する支援の方略には、経験的事実による裏づけが不十分であった。たとえば、問題と思われる場面の共通理解には、口頭での伝達が主であったり、たとえば、ビデオ撮影を行っていたとしてもその分析が不十分であったりした。子育てに関連する、母子を取り巻く、他の母子、スタッフ等の認識にずれがあるのではないだろうか。この問題を解くためには、まずは、子育て支援現場で何が起きているのか、その実践の状況を把握する必要があるように思われた。当事者たちが、現場でどのように振舞っているのかを把握することで、子育て支援に活かすことができる可能性があると考えた。

2. 研究の目的

上述の状況を背景にして、われわれの研究の基礎的方向は、ビデオカメラでの録画とその解析を通して、「母子を取り巻く子育て状況の変化」に伴って現れてきた、現場思考的で実践的な子育て支援が、実際にはどのようなものとして行われているのか、を捉えることにある。そこに、実際の人々の振る舞いや方略に関する差異も現れてきているだろうし、母子や他の母子、スタッフの思いの差異も

現れてきているだろう、と考えた。これは、一方では、相互行為に基づくコミュニケーション研究であり、もう一方では、実践的な「子育て支援」の方略の探求であるということが出来よう。

3. 研究の方法

研究の主要な方法は、「ビデオエスノグラフィー」である。

「ビデオエスノグラフィー」とは、「エスノメソドロジー」と「エスノグラフィー」とを併せ持つ研究方法である。

この方法がなぜ有効であるのかという点について特徴をふまえながら述べる。

エスノメソドロジーは、緻密さに特徴がある。

エスノグラフィーには、そのもつ豊かさが特徴である。

総じて、高度に専門分化した領域を相互行為分析の観点から科学するやり方として、きわめて重要な研究方法である。この手法を用いることで、今まで、解明されてこなかった現場の実践に立脚した新しい発見がなされ、検証されていくことになる。

具体的には、子育て現場の状況を複数のビデオカメラで詳細に撮影し記録する。ついで、現場に参与している研究者、スタッフ等と現場で何が行われているかを共有するために、直後および後日にビデオセッションを開催する。さらに、ビデオセッションのトランスクリプトづくりと関連資料の精査を経て、子育て現場でなにがおこっているかの現況の総体を明確化する。

4. 研究成果

子育て支援現場である子育て支援センターにおける母子を取り巻く相互行為分析を行ってきたが、思いがけない発見があった。以下、2つの事例を取り上げながら、説明していきたい。

1) 子育て支援現場における居場所づくりとして当事者によりなされている工夫を発見した。

「事例1」では、遊びの中で子が「仲間はずれ(フリーライダー批判の対象)(A)」になり、泣き出すという状況が観察された。子の母が周りの様子を見ながら、慎重にふるまう様子が確認された。母親の慎重さは、母自身が「仲間はずれ」とは別の事態解釈の文脈(B)の提示をすること、子に仲間に入っていける具体的な方法を口に出して周りに示しつつ、手を添えて繰り返し子にチャレンジさせること、他の子の母からの「わがまま」批判に対して、直接の反応

を返さず、「わがまま」という決着をさせないこと、で提示された。スタッフからの状況分析発話(A類似の理解)にも反応せず、自力での解決を模索し続けること、母が一見トラブルに見える現象(子どもの視線の秩序において大型発砲スチロールブロックの山の頂上に立つ権利が争われており、その権利が当初は、当該幼児に認められていなかったこと)をあえてトラブル視せず、高度なコミュニケーションをとっていることが確認できた。これらは、子育て現場の仲間作りにも、有効なコミュニケーションであり、子育て現場での母子のゆるやかなつながりと居場所作りの方略であるといえよう。

それらは、子育て支援現場特有の特徴的なものである可能性が示された。ビデオ撮影を行うことにより、普段見過ごしてしまいそうな現象を捉えることができた。また、ビデオデータを繰り返し見ることが可能であるため、子育て支援現場の興味深い相互行為場面の発見につながった。

2) 子の発話である『あぶない』という言葉を経験して母子が遊びの場を協働して作り上げていることを発見した。

「事例2」では、3段の大型発砲スチロールブロックから飛び降りるジャンプ遊びの中で子が『あぶない』という発話を繰り返すという状況が観察された。

母は、子が母の手にハイタッチしながら、ジャンプするように、片手を高く上に上げたり、子の反応を見ながら、手を下に下げたりしていた。母が片手を高く上に上げると、子は『あぶない』と発話し、母が、それに反応して手を下に下げても、同じように『あぶない』という発話を繰り返した。

これらから、対象の母子は、高度な「ハイタッチジャンプ」に挑戦していること、子の『あぶない』という言葉が子にとっての非日常を現していることが観察された。事例では、子が他の母子がしていないような高度な「ハイタッチジャンプ」を経験する時に、子が「大人の注意を引く」言葉として、『あぶない』という言葉が相互行為戦略として発話されている可能性が観察された。子育て支援現場では、母親があえて少しだけ危険な状況を作り出し、子どもの実際の運動能力だけでなく「危険性」というものに関するセンサーを鍛える場として有効に機能していることが提示された。また、子ども自身が、『あぶない』という言葉、を、吟味して使える訓練の場としての機能を持つ可能性のあることが観察でき

た。また、母と子だけでなく周りの母や子どもやスタッフとの相互行為が見てとれた。

遊びの場面では、通常、子どもは「遊ばせられる」という受身的な状況が考えられるが、この場面での母子の相互行為では、お互いにその状況を作り上げているという点で非常に興味深い。

以上のことから、子の遊びの状況は受身的なものではなく、遊びの中の子の『あぶない』という発話を媒介として、子と母が遊びという場を協働して作り上げているということが明確となった。

今まで、事例1、事例2を通して、子育て支援センターにおける母子を取り巻く相互行為の発見を述べてきた。

総じて、子育て支援現場において起きていることの多様さが判明した。

すでに科研の研究期間は終了しているが、国内学会の2つの発表では、聴衆から大変関心を寄せられた。その結果、質疑応答が活発になった。これは、「ビデオエスノグラフィー」という手法が斬新であったことが理由であると思われる。また、その手法を子育て支援現場に持ち込んだということが高い関心につながったということがいえるだろう。今回の学会では、参加者が主に、人文社会学関連であったが、今後は、看護学関連学会、保育関連学会などにも、発表していきたいと考えている。今まで行ってきた2つの発表を振り返り、今後の発表においては、「ビデオエスノグラフィー」を聴衆にさらに理解してもらえようようなプレゼンテーションの改善も図っていきたいと考える。

これらのことから、今まで以上に現場への応用を意識した形で研究を実施し、この研究を発展させていくこととしたい。

また、今回は子育て支援現場である子育て支援センターにおける相互行為を題材として取り扱ったが、次からは、別の子育て支援現場である保育園や、幼稚園等での相互行為分析の研究にも進んでいきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 2 件)

阿部智恵子・榎田美雄

ビデオエスのグラフィーを用いた子育て支援現場の相互行為分析—子どもの泣き出し状況に対する対応をめぐる、第61回関東社会学会,2013年6月16日,一橋

大学（東京都）

阿部智恵子・榎田美雄

ビデオエスノグラフィーを用いた子育て支援現場の相互行為分析—ジャンプ遊びでの子どもの『あぶない』という発話からみえるもの, 第 64 回関西社会学会, 2013 年 5 月 19 日, 大谷大学（京都府）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 智恵子（ABE CHIEKO）
石川県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80337427

(2) 研究分担者

榎田 美雄（KASHIDA YOSHIO）
神戸市看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：10282295